

参考①岩波「新日本古典文学大系」

②新潮「新潮日本古典集成」

③角川「鑑賞日本古典文学」

へいけものがたり
平家物語

ころは二月十八日の酉の刻★ばかりの事なるに、おりふし北風はげしくて、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげゆりすえただよえば、扇もくしに定まらず、ひらめいたり④。沖には平家、舟を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみ⑤を並べてこれを見る。いずれもいずれも晴れならずということぞなき⑥。

与一、目をふさいで「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現・宇都宮・那須の湯善大明神、願わくは、あの扇の真ん中(を)射させてたばせ給え④。これを射せんずるものならば⑤、弓(を)、切り下り自害して、人にふたたび面を向かうべからず⑥。いま一度本国へ向かえんとおぼしめさば、この矢(を)、はずさせ給うな⑦」と、心のうちに祈念して、目を見開いたれば、風もすし吹きよわり、扇も射よげにぞなったりける⑧。

与一、鏑を取ってつがい⑨、よびびいて⑩ひよつとほなつ。小兵というじよう⑪、十二束三ぶせ、弓はつよし、浦ひびくほど長鳴りして⑫、あやまたず扇のかなめぎわ⑬(から)、一寸ばかりおいて、ひいぶつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空ぞ上りける。(扇は)しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の日(を)出したるが⑭、白波の上にただよい、浮きぬ沈みぬゆられければ⑮、沖には平家、ふなばたをたたいて感したり。陸には源氏えびら⑯をたたいてどよめきけり。

★酉の刻は午後五時〜午後七時頃 ※①扇がそれを挟んだ竹竿に安定せずに揺らめいている ※②馬の口輪 ※③どちらを見ても晴れがましい景色である ※④あの扇の真ん中を射させてください ※⑤射損したならば ※⑥腹搔つ切つて、一度と人に顔を会わせることはあるまい ※⑦私を本国に帰そうとお思いならこの矢を外さないようにしてください ※⑧扇も射やすくなっていた ※⑨鏑矢を弓にあてがい ※⑩十分引いて ※⑪小柄とは言いながら ※⑫海岸に響き渡るほど音が尾を引いて ※⑬要のすぐ近く ※⑭夕日が海に輝いているところに、扇に描かれた真つ赤な日が呼応して ※⑮浮いたり沈んだりして揺られていて ※⑯矢を入れる道具

「平家物語」

鎌倉時代に成立した、軍記物。作者は不詳。

冒頭文は、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり」で有名。無常観を基本としながら、勃興し滅びていく平家を中心に、新時代の担い手となった武士を生き生きと描いている。

文章は、和漢混交文で、リズム感に富み、テンポが速く、臨場感にあふれる。

平家物語は、盲目の琵琶法師により、節をつけて語られ、「平曲」と呼ばれた。

引用文は、屋島の場面である。源義経の急襲を受けた平家は、慌てて船で海に逃げ出し、陸の源氏に向けて、一隻の船を漕ぎ出した。舟に立てた竿の先には、金地に朱の日の丸を描いた扇が挟んである。源氏側の弓の名手、那須与一は義経の命令で、鏑矢という音の鳴る矢をつがえて、見事扇を撃ち落した。迫力のある視覚的な表現が読むものを引き込む。それまで文藝と言えば、和歌や源氏物語などのように情緒や感性、心の機微を表現するものであったが、平家物語では、武士の身体や行動を描写することで、躍動する人間像を描きだして、新時代を感じさせる文章となっている。